

姉妹都市公式訪問を終えて

結論から言わせていただくと、改めて姉妹都市交流の大切さを再認識させられた視察であった。

3都市で温かく迎え入れられたのは、30年の歴史のたまものであると思い知らされた。非常にハードな訪問スケジュールではあったが、3都市を駆け巡ったわけだから致し方ないのかなと思われる。

ミデルブルフ市では、市長みずから「さるく」に合流されたのは、楽しいひと時であった。また、長崎市民による「版画展」が開催され、民間による交流が行われていることに心強さを感じた。

「カーン戦争記念館」では、ジェロン市長のあいさつで、戦争のむなしさについて、永井博士の言葉を引用されたことは、驚くとともに感動を覚えた。

ヴォスロール村では、人口350人という小さな村ではあるが、ド・ロ神父で結ばれたヴォスロール村と外海町の人たちの交流の深さを目の当たりにし、いかに人と人との交流が大切なことであるかを思い知らされた。

ポルト市では、今年の5月、姉妹都市提携30周年を記念して「ポルト市における日本」という事業が約1か月間、40以上のイベントが展開されたとのこと。

在ポルトガル大使館、神山公使のアドバイスとして、今後は、日本全国のポルト、ポルトガルと縁のある各都市と連携して行動をともにされた方が、より良い効果を生むのではないかというお話があった。

ユネスコ・パリ本部では、松浦事務局長を表敬。世界遺産登録についてお尋ねし、懇切丁寧に説明をいただき、大変参考になりました。



ユネスコ・パリ本部

最後になりましたが、姉妹都市交流は、まず、人ありき、行政・議会・民間が三位一体となって絆を深めていくことが寛容ではないかと思った次第です。